

平成十六年度金沢大学附属図書館・資料館特別展

文字

人

こころ

金沢大学ゆかりの墨跡、拓本、手跡

平成16年10月25日（月）～11月7日（日）

10時～16時（11月3日を除く）

金沢大学附属図書館・資料館



## ごあいさつ

本学が新制大学として呱呱の声を挙げたのは 1949 年 5 月のことですが、その濫觴は遠く加賀藩校の「明倫堂・経武館」(1792 年) に遡ります。爾来、この地には藩政末期の壮猶館(1854 年) や卯辰山養生所(1867 年) をはじめとして、金沢藩医学館(1870 年)、石川県師範学校(1874 年)、同女子師範学校(1875 年)、石川県金沢病院(同年)、啓明学校(1876 年)、金沢医学学校(1879 年)、石川県専門学校(1881 年)、第四高等中学校本部及び医学部(1887 年)、同医学部薬学科(1889 年)、第四高等学校(1894 年)、金沢医学専門学校(1901 年)、金沢高等工業学校(1920 年)、金沢医科大学(1923 年)、金沢工業専門学校(1944 年)、金沢高等師範学校(同年)等々、枚挙に暇ない程の教育・医療機関が設置改廃され、幾多の逸材を世に送って参りました。

方今、法人化の時代に至り、国立大学は独自の将来構想を描き、教育、研究、医療の諸方面にゆたかな個性を発揮して、社会に貢献して参らねばなりません。一元的管理から解き放たれた大学は、何を目標として明日を語ればよいのでしょうか。その答えを得ることは容易ではありませんが、過去への理解と省察を欠いた未来像は誠に危うく、過去を捉えるためには資料が不可欠であることを、私たちは瞬時も忘れてはならないと思います。

本年の資料館特別展は、附属図書館との共催という形をとり、本学にゆかりある先人の筆跡や関係資料を学内外から一堂に蒐め、公開展示することに致しました。展示スペースの関係で一見不統一にも見えますが、学都金沢ならびに本学をはぐくんだ歴史的環境に思いをはせ、そこで多くの学生、教員、関係者らが、経済的には必ずしも恵まれない状況のもとで、いかに研鑽に励みまた協力を惜しまなかったか、それぞれの筆跡等に接しながら一端を汲みとって頂きたいと思います。それは本学の将来を照らす鏡となり、この時代を乗り切る指針ともなると信じるからであります。

末尾ながら、本展開催にあたり貴重な資料の出品をご快諾くださいました関係機関の皆様に、心から御礼申し上げます。

2004 年 10 月

金沢大学資料館長 笠井純一

# 出品目録

番号	制作者	資料名	形態	所蔵
<b>【1.高句麗広開土王碑拓本】</b>				
1		広開土王碑拓本	拓本軸装	附属図書館
2		広開土王碑拓本解説	冊子	附属図書館
<b>【2.「明倫堂」加賀藩校の扁額】</b>				
3	新井白蛾	明倫堂	扁額（木製）	資料館
4	新井白蛾	同文通考補	和装本	附属図書館
5	富田景周	燕台風雅（写本）	和装本	附属図書館
6	黒本稼堂	三州遺事	和装本	附属図書館
<b>【3.「経武館」加賀藩武学校の扁額】</b>				
7	前田直方	経武館	扁額（木製）	資料館
8	前田直方	文化九年迄 前田土佐守家譜 下書	自筆稿本	附属図書館
9		前田直方肖像	紙本軸装	前田土佐守家資料館
<b>【4.蘭医学の導入】</b>				
10	黒川良安	自筆書状	自筆書状	医学部記念館
<b>【5.金沢藩お雇外国人教師スロイス】</b>				
11	藤本純吉	スロイス口述「舎密学」自筆稿本	自筆講義筆記	金沢市立玉川図書館 近世史料館
12	藤本純吉	スロイス口述「究理学」自筆稿本	自筆講義筆記	金沢市立玉川図書館 近世史料館
13		分光器	物理学実験機器	資料館
14	藤井貞為	スロイス口述「舎密学」自筆稿本	自筆講義筆記	金沢市立玉川図書館 近世史料館
15	リッテル	化学日記	和装本	金沢市立玉川図書館 近世史料館
16	リッテル	理化日記	和装本	金沢市立玉川図書館 近世史料館
17	スロイス夫人と子息	Natuurlijke Historie van Nederland de Flora by Oudemans, C. A. J. A., Amsterdam, 1869.	書籍に書き込み	附属図書館医学部分 館
18	藤本純吉	スロイス口述「植物学」自筆稿本	自筆講義筆記	金沢市立玉川図書館 近世史料館
<b>【6.「金沢病院」蘭医学からドイツ医学へ】</b>				
19	三条実美	金沢病院	絹本 扁額	医学部記念館
20		加賀金沢細見図 明治20年5月	絵図	金沢市立玉川図書館 近世史料館
21		加賀金沢細見図 明治9年12月	絵図	金沢市立玉川図書館 近世史料館

【7.第四高等中学校校舎の設計図・棟札】

22		棟札「明治 23 年 8 月起工明治 24 年 7 月竣工 第四高等中学校医学部解剖組織学教場」	木製棟札	医学部記念館
23	山口半六, 久留正道	第四高等中学校医学部解剖組織学講堂平面之図	和紙 墨描淡彩図面	第四高等学校同窓会
24	山口半六, 久留正道	第四高等中学校医学部解剖組織学講堂切断之図	和紙 墨描淡彩図面	第四高等学校同窓会
25	山口半六, 久留正道	第四高等中学校物理化学平面及前面之図	厚地和紙 墨描淡彩図面	第四高等学校同窓会
26		医学部東部教場	和紙 墨描淡彩図面	第四高等学校同窓会
27		医学部西部教場	和紙 墨描淡彩図面	第四高等学校同窓会
28		第四高等中学校略図 「第四高等中学校一覽 自明治 26 年至明治 27 年」付録	冊子	附属図書館

【8.第四高等学校をめぐる人々】

29	小松宮彰仁親王	至誠	絹本 扁額	資料館
30	西田幾多郎	一日不作一日不食	紙本 扁額	教育学部
31	岡上梁	至誠無息	紙本 扁額	附属図書館
32	市村塘	Physiologie und Physiologische Chemie, K.Ozawa u. M. Kumagawa	自筆講義筆記	附属図書館
33	市村塘	Botanik, von Prof. J. Masumura	自筆講義筆記	附属図書館
34	市村塘	Palaeontology, by Prof. M. Yokoyama	自筆講義筆記	附属図書館
35	市村塘	Comparative Anatomy, I. Iijima	自筆講義筆記	附属図書館
36	市村塘	石川県下野生有用植物	著書	附属図書館
37	浦井鍠一郎	復習用西洋歴史年表	書籍に書き込み	附属図書館
38	黒本稼堂	師友簡録	自筆稿本	附属図書館
39	黒本稼堂	自筆短冊	自筆短冊	個人蔵
40	狩野亨吉	自筆短冊	自筆短冊	個人蔵

【9.石川の知識人】

41	永井柳太郎	明朗敢為	紙本 扁額	資料館
42	永井柳太郎	暁烏敏宛書簡 (満洲実録)	書簡を書籍の帙に貼る	附属図書館
43	暁烏敏	奉事億如来	紙本 扁額	附属図書館
44	暁烏敏	飛化遍諸刹	紙本 扁額	附属図書館
45	暁烏敏	精神界原稿 歎異抄を読む(46)	自筆原稿	附属図書館
46	暁烏敏	精神界 3 卷 1 号	出版物	附属図書館
47	暁烏敏	現身仏と法身仏 姉崎正治著	書籍に書き込み	附属図書館
48	暁烏敏	遠羅天釜 3 卷、続集 1 卷 白隠慧鶴著	書籍に書き込み	附属図書館
49	暁烏敏	火の柱 木下尚江著	書籍に書き込み	附属図書館
50	森田柿園	加賀諸神社縁起	自筆稿本	附属図書館

## 1. 「高句麗広開土王碑拓本」

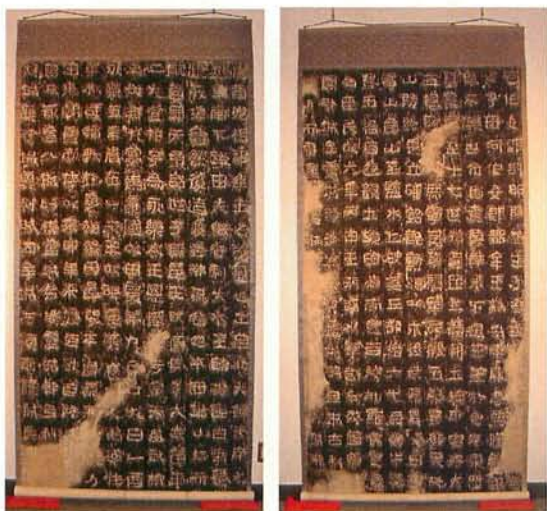
### 1. 「広開土王碑拓本」

制作者、年代等は未詳、軸装、

附属図書館蔵 第四高等学校旧蔵

本紙 139×280(cm)

(全8幅 展示はI面上下の第1幅・第2幅)



広開土王碑は中国吉林省集安にある高句麗第19代広開土王(在位 391-412)の顕彰碑。414年建立。好太王碑ともいう。高さ約6.3m。碑文は碑石の4面に、各面11行・10行・14行・9行、毎行41字(碑石の形状との関係で一部は41字未満)で刻まれ、総字数は約1775字。碑石は荒草に埋もれていたが、1880年に再発見された。日本へは1883年に陸軍参謀本部員・酒匂景信(さかわかげあき)が拓本を将来し、「倭以辛卯年来渡口破百殘口口新羅以爲臣民」(1面9行目)などから、5世紀における倭の朝鮮半島進出を示す史料として注目された。また、日本の参謀本部が石灰を塗布して文字を改竄したとの説が話題になったこともあるが、石灰塗布以前の原石拓本が確認され、この説は否定されている。本拓本は、大正5年(1916)に、金沢の歩兵第7連隊連隊長・梅津忠清が四高に寄贈したもの。21字目と22字目を境に各面が上下二段に分かれ、8幅からなる。特徴的なのはII面以降にずれがあることで、II面は11行とされてIII面第2行がII面最終行にあり(第III面第1行は欠)、III面は10行とされて第3～12行からなり、IV面は11行とされてIII面第13・14行がIV面の最初にある。大変珍しい例で、原石拓本の可能性を含めて、今後の詳細な検討が必要である。

### 2. 『広開土王碑拓本解説』

著者不明、大正7年、直筆稿本、

附属図書館蔵

## 2. 「明倫堂」 加賀藩校・明倫堂の扁額

### 3. 「明倫堂」

新井白蛾書、寛政4年(1792)、扁額、

資料館蔵 石川師範学校旧蔵

280×130×40(cm)



前田治脩(はるなが)が綱紀の意思を継いで、京都の儒学者新井祐登(白蛾)を招き、文武の学校の設置を計画させ、寛政3年(1791)10月に兼六園の傍、長谷川邸跡に着工し、翌4年2月に落成した。文学所を「明倫堂」とし、演武場を「経武館」と呼んだ。授業は7月2日より始り、文学、皇学、漢学、医学、天文学、易学、算学、法学、武学等を教授した。文政5年(1822)3月の仙石町(現、中央公園内)に移築した。明治3年(1870)10月に閉校となった。

### 新井白蛾 あらいはくが 1715-1792

明倫堂の題字は、加賀藩校の初代学頭・儒学者新井白蛾によって書かれた。

白蛾に関する資料は、『先哲叢談後編』(東条琴台、1830)がある。『先哲叢談』(せんてつそうだん)は、著名な儒学者の言行・逸話を集めたもので、正編、後編、続編がある。

『先哲叢談後編』によれば、新井白蛾、名は祐登、字は謙吉、白蛾と号す。黄州、龍山、古易館などの別号があった。通称は織部、のち白蛾を通称とした。白蛾の父祐勝は加賀の人であり、浅見綱斎(あさみけいさい)(1652～1711)に学び、江戸に住んだ。白蛾は江戸で生まれ、菅野兼山(すがのけんざん)(1680～1747)に師事して学業を磨いた。兼山は三宅尚斎(1662～1741)の門人であり、山崎闇斎(1618～1682)の学系に属する人である。

白蛾は22歳で神田紺屋街に私塾を開くが、当時、荻生徂徠(おぎゅうそらい)が「漢魏の古学、明の李王の修辞を以て一世を風靡し」ていたために、これと競合できないと判断して京

都に移った。「易説\*を研究し、占筮(ていぜい)しばしば奇驗あるを以て、その業一世に盛なり、号して古易の中興と曰ふ」と記載されている。彼の占いはよく当たったことを物語っている。

白蛾は京都では成功し、「生徒輻輳」した。儒学者芥川丹邱(あくたがわたんきゅう)(1710~1785)は、白蛾の著書『古易対門』の序文で彼を絶賛し、これにより「儒流皆白蛾が易に精き、世の占筮者の類にあらざるを知る」ことになった。彼の著書『古易一家言』は、1年で2500部売れたといわれ、これは当時のベストセラー服部南郭の『唐詩選』(1724)に匹敵した。

なお、新井白蛾と新井白石との血縁関係は、白石の家系には、白蛾もその父祐勝の名も見られないことから、ないとされる。

\*『易経』は、五経の筆頭に置かれる儒教の教典であり、占いのテキストであった。周易、易ともいった。易経に関する解釈学を易学という。卦(か)すなわち陰と陽の組み合わせで、国家の命運、個人の生き方の道理を説き、儒教的宇宙観を示した。

#### 4. 『同文通考補』

新井白蛾著、宝暦10年(1760)、  
附属図書館蔵

白蛾の易学以外の著書では、『同文通考補』がある。新井白石(1657~1725)の文字論を補ったものである。なお、白蛾に関する地元の資料としては、『燕台風雅』と『三州遺事』がある。

#### 5. 『燕台風雅』 えんたいふうが

富田景周著、文政8年(1825)、写本、  
附属図書館蔵

加賀藩の重臣富田景周(とだかげちか)(1746~1828)によるものであり、藩初から寛政に到るまでの学者・文人の伝と漢詩文の佳作を集めたものである。「原撰は寛政3年に終わったが、後に追記を加え、文政8年之を藩侯に献じた。」と『加能郷土辞彙』に記されている。ちょうど明倫堂創建の頃に著作されたことになる。

白蛾に関しては、「初めて本藩に来る、先生時に齢七十有七」、「先生(白蛾)をして明倫堂の額を書かしむ」「(白蛾)が師事する所凡て三十有六人、荻生茂卿亦其の数の中にあり」、などとあり、『先哲叢談後編』にない記述もある。

白蛾の生年は『先哲叢談後編』の「寛政4年(1792)5月14日を以て、賀州の金沢に没す、享年68歳なり」から推せば、享保10年(1725)となるが、『燕台風雅』の「初めて本藩に来る、先生時に齢七十有七」の記述からは、これより10年遡り、正徳5年(1715)と推定される。

#### 6. 『三州遺事』

黒本植著、昭和6年(1931)、  
附属図書館蔵

『燕台風雅』の記述をもとに、新たな人物を取り上げ、人物の小伝を記している。白蛾については、明倫堂の創設から144年後の記述であるが、次の文章のように、稼堂自身の考えが述べられていて興味深い。

「その額字を書く、人しらす心をこめられしものとみえて、白蛾没後その室の長持を披きて、みたるに、明倫堂三字の草紙、みちみちたりといふ。」筆勢に関しては、「書法謹嚴、筆意端莊、仰きてこれを見る、肅然襟を正さしむ」とある。また、「嗚呼七十七の老儒にて日夜経営の任に膺(あ)たる、かくのこくならでは、何そ一藩の学風を振起することをうへき、今日学校の先生果していかに、聘するもの若きを聘し、老たるもの若きに譲る、こゝに於て乳児鼓口教乳児の観あり、かようなありさまにて子弟の薰陶など、おもひもよらぬこと也」と、シルバー人材の登用をたかく評価している。

#### 加賀藩校「明倫堂」の開校と新井白蛾

加賀藩11代藩主前田治脩(はるなが)(1767~1810)は前代藩主重教(しげみち)(1754~1786)の遺志を継ぎ、学校創建に着手し、その教官として儒員の人選にあたった。

重教の時、天明6年(1786)1月から、城内で毎月2回儒者による経書の講義が行われた。この講義はやがて明倫堂助教が講師となり慣例化して、いわゆる「滝ノ間の講書」と云われて、明治維新頃まで続いていた。その講師のひとりに新井白蛾がいた。

寛政3年(1791)4月、年寄奥村河内守尚寛(ながのぶ)は、藩主治脩の意を受けて、白蛾に講師を引き受けることを打診した。その書簡は「内密に申達候」で始まり、先生の卓識の程を主人加賀守が聞き及びになられ拙者へもお尋ねになった、「仕官承引においては、本懐の至り、大慶致さるべし」とあり、藩主が「先生を慕われ候心の程、中々愚筆に尽しがたき故、短文かくの如く候。書余、賢慮に任せ候」(『稿本金沢市史学

事編第一』p65)などと記されていた。奥村自身も白蛾に既に師事していたために、この人選に関わったものと思われる。

白蛾はこの招きに同意して、寛政3年8月に京都から金沢に下向した。9月1日に白蛾は初めて治脩に謁見した。9月11日には学校惣奉行として奥村河内守尚寛、横山山城守隆従(たかより)、前田大炊孝友(おおいとかとも)が任命された。白蛾は、この学校の用地の調査と創建に関する助言を行った。

治脩は、盗賊改方奉行高島五郎兵衛に「此用向至而内密に候條」として、「入門之上、白蛾人品の様子得与相考、存寄之通可申聞事」と命じた。高島は9月に白蛾に入門して、調査を開始した。10月に、高島は「白蛾、信義相守申奉存候」と報告した。

治脩はさらに、高島に老臣達一山城、大炊、玄蕃助(本多政成(まさよし))一に、門弟であるから白蛾についての意見もあるだろうとのことで、それを聞かせた。山城、大炊は、「評判について特に聞いてはいない」と軽く流したが、河内は「最眞」であるので、「今度召し出され候場に至り候様取々申す」とこの人選を決定した場に居たようにいろいろ話した。この様にして、学頭の人選が行われたのである。

明倫堂と経武館の建物は、兼六園内金沢神社の地、旧長谷川邸跡に寛政3年10月に着工し、翌年2月に竣工した。同時に白蛾はこの藩校の学頭を命じられた。明倫堂は、その後2度移転して、藩末期には現中央公園内にあった。

寛政4年閏2月に、白蛾は「学校は礼儀礼格を重んじる」ところであり、「自分が平士で学校に出席して、学生も同役同格では教導に支障をきたす」として平士以上の待遇を求めたが、この申し出は却下された。このことは学頭であっても教師の身分格が低かったことを示している。

同年3月2日に明倫堂・経武館の開学式が行われ、治脩の臨席のもとで、白蛾は孝経を講義した。高齢(78才)の白蛾は開校の後2ヶ月あまりの5月14日に没した。授業開始は暑さが遠のいた旧暦7月2日であった。

明倫堂は明治2年(1869)3月の制度改革で学政寮文学局のもとに置かれ、翌3年末に閉校され、中学東校(洋学中学校)と中学西校(皇漢中学校)となった。しかし、明治4年の廃藩置県により、すべての藩校は廃止となった。

明倫堂の図書目録が金沢市立玉川図書館にあり、当時どのような講義がなされていたかを推し知ることができる。

### 3. 「経武館」 加賀藩武学校・経武館の扁額

#### 7. 「経武館」

前田直方書、寛政4年(1792)、扁額、

資料館蔵 石川師範学校旧蔵

280×120×40(cm)



経武館の額の制作過程について、『加賀藩資料』、『日本教育史資料』巻2(文部省総務局)\*及び「文化九年迄 前田土佐守家譜下書」\*\*に記載されている。経武館の額の成立過程をこれらの資料から推察することができる。

\*『日本教育史資料』: 文部省によって編纂され明治23年(1890)から25年にかけて発行された日本教育史の調査報告及び史料の集成。文部省は明治16年に各府県に通達を出して、学制改革以前の学事について調査をさせた。石川県からの報告が「旧藩学校沿革調」(明治17)である。

\*\* 出品番号8参照

明倫堂・経武館の開学式は、寛政4年(1792)3月2日に行われた。開学式の翌日、前田治脩(はるなが)は土佐守に経武館の額を調筆するよう命じた。治脩が参勤交代のために江戸に向かったのが3月6日であった。

明倫堂の額は、既に作成されており、開学式には掲げられていた。経武館の額は、それより2寸小さく作ることにした。額の調筆を依頼された土佐守は制作に入ったが、次の文章から制作に伴う苦悩を伺うことができる。

前田直之系前田氏の家祖前田利政から文化 10 年七代直時までの記録を編年体で記載したもの。『前田土佐守家家譜并諸事留』の下書とみられる

### 9. 「前田直方肖像」

制作者、年代等は未詳、紙本軸装

前田土佐守家資料館蔵

本紙 38×100 (cm)



前田直方 まえだなおただ 1748-1823

前田直方は前田直之系前田氏の 6 代にあたり、前代直躬の 3 男で、加賀藩年寄を勤めた。直方の事跡を伝えるものとしては、土佐守家資料館所蔵の『前田土佐守家家譜并諸事留』が詳しい。これは家祖前田利政から直方の孫の直時(なおとき)代までの各人の経歴を記したもので、おそらく直方が編集したと考えられる。その下書が今回展示されている『文化九年迄前田土佐守家譜下書』である。これらの家譜類のうち直方の手になると推測されるものが今回の展示物も含め 8 点あり、おそらく、度々、書き継いだり編集し直したようである。

直方は寛延元年(1748)閏 10 月に生まれ、宝暦 13 年(1764)正月に元服し、新知 2500 石で召し出だされた。安永 3 年(1774)4 月に父直躬が没すると、同年 6 月に家督相続を命じられ遺領の一万千石を相続し、年寄に就任し月番・加判となった。

直方は寛政元年(1789)に年寄職を免じられ、それ以来 17 年間藩政から遠のく事になる。その間の寛政 4 年に経武館の額の題字を書いた。そして、文化 3 年(1807)に年寄職に復帰、3 年後の文化 7 年には勝手方主付という藩財政の最高責任者

経武館之文字相調候様先達テ被仰出候ニ付

経武館の文字を調筆するよう、

先だつて、命ぜられました

二通り相調見申候 調方等モ可有之哉ニ候得共

二通り調筆してみましたが、

これという書き方もあると存じますが

調方一向ニ習申儀モ無御座

お習字など、習ったこともないし

字之大小之儀モ難計

字の大きさをだつて、これでいいのか悪いのか

甚見苦敷御座候得共

はなはだ、見苦しいかもしれませんが、

被仰出之儀ニ付先相調見申候

ご命令ですので、調筆してみました。

相調見申候下書ニ通り指進之候間

下書二通りを提出しますので

可然様御取り計之様致度御座候以上

しかるべくお取りはからいくださいますよう

お願いします。

[寛政 4 年 6 月 23 日]前田土佐守書状 奥村河内守・前田大炊宛, 出典:『日本教育史資料』

土佐守は 6 月 23 日に調筆した楷書と行書の 2 通りを 2 枚ずつ提出して、治脩に選択してもらふことにした。参勤交代で江戸加賀藩邸にいる治脩は「お序での折ご覧になり」、行書の 1 枚を選んだ。選んだ 1 枚を別にして上包みにして、不用の 3 枚も返却した。

このことが奥村河内守と前田大炊から土佐守に知らされたのは 7 月 23 日である。この間に、楷書と行書各二枚が、金沢と江戸を往復したことになる。

治脩は、翌寛政 5 年 4 月 16 日に江戸から金沢に戻っていたが、5 月 15 日に「調上候処」の完成した経武館の額をご覧になり「格好等宜出来、ご喜悅に思し召され」た。土佐守は縹紗の羽織\*\*\*一、越後縮二反、をご褒美として拝領した。

\*\*\*縹紗の羽織: 縮み織のうす衣の羽織(夏物の上着)

### 8. 『文化九年迄 前田土佐守家譜下書』

前田直方著、年代未詳、自筆稿本、

附属図書館蔵



となり、改作法復古政策の中心的指導者となるも、挫折し文化9年に年寄を退職し、隠居した。文政6年(1823)11月、76歳で没した。

以上のような藩政の指導者としての側面だけでなく、直方には文化人・著述者としての側面がある。現在、土佐守家資料館には直方自筆の史料が約350点残っている。その内容は農政をはじめとする藩政関係、歴史書、随筆的なもの、精神論的なもの等である。このような大量の著述を残し、また、その内容から直方は好学の人と想像される。意外かも知れないが直方の学問的基盤は儒学ではなく、おそらく、藩学であった有沢流と呼ばれる兵学である。16歳の頃の有沢流入門の起請文、そして42歳の時の有沢流の奥秘伝授の請け書がそれを示している。また、直方は藩の軍備等の軍事的諸問題についても記述しているが、それらも有沢流の影響を受けた内容である。しかし、晩年の著述においては儒教的な精神論が目立つのも特徴である。そのためこれらの史料は、当時の武士における兵学と儒学の受容のあり方を考える好資料であり、また、直方個人の人となり伝える珍しく興味深い史料である。

## 4. 蘭医学の導入

### 10. 「黒川良安 書状」

黒川良安書、自筆書状、

医学部記念館蔵

24×18(cm)



私儀今日結構之被仰出を以、  
御加増知五十石拝領被  
仰付無存懸難有仕合奉存候  
依而今昼夜之内御出御祝被下度候  
右御普為聴申上度旁如斯御座候  
以上  
八月十四日

慶応3年(1867)黒川は、卯辰山養生所主附となり禄50石を加増され、これを祝って親族を招いた。親族のひとり松崎久太夫に宛てた書状。

### 黒川良安 くらかわまさやす 1817~1890

幕末から明治初期の蘭学者。加賀藩の蘭方藩医。

父は富山藩医黒川玄龍、現富山県上市町黒川町に生まれる。文政11年(1828)父と共に長崎に遊学し、通詞吉崎権之助に就き蘭語を学ぶ。父の帰国後も長崎に12年間留まり蘭学を学ぶ。

天保11年(1840)家老青山将監の薦めで加賀藩に召し抱えられるが、翌12年江戸の坪井信道に師事する。弘化3年(1846)加賀藩医となる。嘉永3年(1850)加賀藩最初の種痘を行う。安政元年(1854)壯猷館の開設と共に翻訳方となり、同4年江戸詰となり幕府蕃書取調教授手伝を命ぜられ、箕作秋坪らと親交があった。文久元年(1861)加賀藩軍艦御用兼務を命ぜられ、元治2年(1864)加賀藩種痘所棟取に任ぜられる。慶応3年(1867)加賀藩卯辰山養生所主附となり禄を増し180石に至る。明治3年(1870)金沢藩医学館総督医となるが、同4年廃藩置県に際し辞職した。

## 5. 金沢藩お雇外国人教師スロイス

スロイス Pieter Jacob Adriaan Sluys 1833-1913

スロイスは1833年8月16日オランダ南部ステーンベルヘンで生まれ、1849年ユトレヒト陸軍軍医学校に入学、1854年オランダ東インド陸軍に入隊、一等軍医となる。1866年に学位を取得した。

ユトレヒトに留学中の伍堂卓爾が、加賀藩と取引のあったドイツ商人アデレアンの仲介により、オランダ陸軍軍医総監ファン・ハッセルトと交渉した。明治2年(1869)8月アムステルダムでスロイスと月給洋銀400ドルで3年間金沢の医学館において医学生徒を教育し、病院内外の患者の治療に従事する契約をした。

明治4年1月10日、彼は夫人同伴で香港を経由して横浜に到着した。ここに滞在の間、彼は帰国するために横浜に来ていたハラタマ(Koenrad Wolter Gratama)と会っている。

明治4年4月2日、神戸より陸路金沢に到着し、金沢大手町外国教師館(元寺西邸)を宿舍とし、後に城内玉泉院丸の洋館に移った。直ちに医学館での教育方針を決定して、「医

学館規定」には教育には5年を必要とするとし、その内容を定めた。教育教科と履修年限は次の通りである。

第一年 解剖学\*、繃帯学、理学、動物学\*

第二年 局処解剖、健康学\*、化学\*、生理学\*、植物学\*、顕微鏡検査、薬剤学\*

第三年 病体解剖、病学通論、外科通論、外科手術\*、内外科検査、打検法、聴取法、驗温器用法、病床顕微鏡用法、

第四年 病学各論、外科各論、外科手術\*、内外科検査法、眼科\*、男子生殖器病、中毒学、軍中療法\*、銃病療法、仮死検査法、人為呼吸法

第五年 内外科検査、皮膚、梅毒治療、婦人生殖器病、喉鏡用法、産科、医学歴史、越列機用法、精神病、断訟法

この5か年の教育を受けたものには、試験を課した。上記の学科のうち下線を付した学科はスロイス自身が受け持った学科であり、\*のものは後記の藤本純吉による講義録が現存するものである。講義録にはこれらの他眼科手術学、有機舎密学抄、徴兵検査法記、私魯伊斯氏方叢などもある。

スロイスは午前8時から10時まで授業を口述で行った。武谷俊三、伍堂卓爾、馬場健吾が通訳し、それを記録させ、日本人教師により繰り返し教える方法をとった。10時から午後4時までは病院での患者の診療にあたった。

藩は明治4年7月に兼六園内に「理化学校」を設立し、高峰精一を総理とし、スロイスはここで医学のための基礎を講義した。

スロイスの仕事ぶりは高く評価され石川県当局は「東京、長崎を除くの外、即今医学の盛んなる豈当県の右に出る者あらんや」と記している。3年の契約が終わり、スロイスは明治7年10月1日に金沢を去り、横浜より船で11月25日オランダへ帰国した。

スロイスの指導を受けた者が、その後、金沢、富山、福井において、新しいオランダ医学でこの地方の医療分野に大きな貢献をした。本学の医学部にとっても、この医学館は重要な前身校である。

## 11. 『舎密学』(せいみがく)

スロイス口述 藤本純吉(清辰)筆記、自筆稿本、  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

医学館に明治4年に第1回生として入学した藤本純吉が筆

記したスロイス「舎密学」の講義録である。この記録により、スロイスが行った化学講義の内容を詳細に知ることができる貴重な資料である。

従来のわが国の化学史では、「明治3年12月から大阪理学所で始まったリッテルによる講義が、ヨーロッパの最新の講義を伝えたものである」としていた。しかし、明治4年3月に始まったスロイスの講義を、リッテルの講義と比較すると、従来の定説は誤りである。この事実を示す資料が、この講義録である。

リッテルの講義は1850年代の化学であり、近代化学とはかけ離れたものであった。一方、スロイスの講義は、1860年代後半の化学であり、その内容は正に「近代化学」の始まりであった。本講義録には多くの化合物の分子式、化学反応式が記されている。これらはいずれも現在の化学で使用されてものと同じものであった。

近代化学の始まりは、ここ金沢を出発点としていたのである。

## 藤本純吉 ふじもとじゅんきち 1850-1938

藤本純吉は、スロイスの講義をはじめて受けた9人の学生の中の一人であった。「藤本純吉伝」によれば、小泉弥太郎次男として嘉永3年(1850)4月17日に生まれた。名乗を「清辰」と言った。元治元年(1864)9月に藤本家に養子として入る。明治初年の大改革では従来の藤本家の家業では身を立て、家を継続することも難しいと悟り、家業を棄て医師になる事を志して、明治2年(1869)2月旧藩主侍医黒川自然に随い医学の修業を始めた。明治4年1月10日医学館へ入学して、同年3月より同7年9月まで同館教師オランダ陸軍第一等医官スロイスに随い、理化学・動植物学、健康学、解剖学、生理学、薬剤学、普通病理学、包帯学、内外科学を学んだ。次いで明治8年8月より同11年12月まで石川県金沢病院教師オランダ医師ホルトルマンに随い、局所解剖学、眼科学、組織学、外科学、産科学、中毒学を学んだ。藤本は2人のオランダ人教師の講義録35点を残している。この事は、医学史上でも貴重なものである。

明治4年11月に医学館調合役、同6年4月私立医学館副直医、8年7月金沢病院副直医、11年9月金沢医学所助教諭、12年11月金沢医学校教諭、16年12月医学校御用掛兼務、11年2月医術開業免許を受ける。明治18年2月には私立尾山病院に移った。

藤本純吉は金沢における近代医学の発展に、また金沢医

師会の設立にも大きく貢献した。彼の収集した膨大な蔵書は、藤本文庫として金沢市立玉川図書館近世史料館に架蔵されている。

## 12. 『究理学』

卷之一、物理学一般、力学

卷之二、力学、音学、静電気学

卷之三、電磁気学

卷之四、光学

スロイス 口述、藤本純吉 筆記、自筆稿本  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

スロイスが明治4年(1871)3月から行った物理学の講義を、通訳が翻訳し、藤本が筆記した講義録である。本講義録で注目されるのは電気(静電気、電磁気学)に関する部分である。

従来、日本の物理学史では、大阪舎密局での H.リッテルの物理学講義「物理日記」が新しい本格的な講義であったと記している。しかし彼は、電気に関する講義は行っていない。同時期にスロイスは電気に関する詳しい講義をしていた。このことはスロイスこそ「本格的な物理学」を初めて行った人物であるとするに相応しい事を示している。スロイスは Ganot の Physics や Müller の Lehrbuch der Physik und Meteorologie などを使用していたことが、引用した図から推定される。

例えば、巻之四 光学の分光器のところが図は Ganot の教科書のもと同じである。スロイスは舎密学でも分光分析の話をしていた。ここでは Miller のテキストの図と同じものを藤井貞為が描いている。

## 13. 「Kirchhoff・Bunsen の分光器」

資料館蔵



本器は石川県専門学校で明治14年(1881)から20年の間に購入された分光器である。これと同じ型の分光器の図がスロイスの講義録にある。Kirchhoff・Bunsen (ドイツ)により作られた

分光器であり、1859年に彼らはこれによって分光分析法を開発した。1863年には新元素インジウム(In)、およびルビジウム(Rb)を発見した。スロイスは舎密学でこの二つの元素の発光スペクトルについて、また分光分析法で  $1/(3 \times 10^8)$  g のナトリウムが検出できる事にも触れている。

スロイスにより、わが国に初めて分光分析法の紹介がされた。

## 14. 『舎密学』(せいみがく)

スロイス 口述、藤井貞為 筆記、自筆稿本、  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

金沢市立玉川図書館近世史料館に収蔵される「舎密学」は、藤本純吉と共にスロイスの講義を受けた藤井貞為により筆記されたものである。本書は稿本であり、かなり傷んでいるが、その実験装置の図は優れたものである。特にキルヒホフ・ブンゼンの分光器の図は、スロイスが講義に使用した Miller の Elements of Chemistry に記載された分光器の図と全く同じである。この事から、逆にこの化学教科書をスロイスがテキストとして使用していたことが明らかとなった。

藤井貞為は武蔵国で土井家に天保11年(1840)12月生まれた。慶応3年(1867)に藤井家に養子入りした。明治6年(1873)に家督相続を行った。明治3年3月に金沢医学所に入學した。スロイスおよびホルトルマンに師事して内外科医学を学んだ。同7年に金沢病院当直医ならびに医学所二等助教になり、同9年10月に富山医学所副校長心得、同11年富山病院長心得、富山医学所教長心得、同13年8月に富山病院当直医兼高岡分病院長となり、長く地方医療に多大の貢献を残した。

## 15. 『化学日記』

リッテル 文部省版 明治7年(1874)、  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

H.リッテルの明治3年12月からの「大阪理学所」での化学・物理学の講義が、まず、市川盛三郎訳で「理化日記」として、同年から5年にかけて、大阪開成学校より順次出版された。これが後に、文部省により「化学日記」・「物理日記」に分割されて、東京で出版された。但し、内容はかなり追加されている。本書の表紙には「明治7年5月」と記されているが、出版社「御書物師 出雲寺萬次郎」は「出版明治9年7月25日」と記している。

本書は化学の初心者が理解出来る様に考慮されて書かれたものであると言われて、また従来わが国での「新式化学」の初めての講義であると言われてきた。しかし、その内容をよく検討すると、分子式、化学反応式の記述、化学反応基の記述などは、1850年代の古いものを使用していた。例えば、水は  $\text{H}^2\text{O}$ 、硝酸は  $\text{HO}\cdot\text{NO}^2$ 、で表記していた。このことから、新式化学とするのは間違いである。

スロイスの舎密学講義とリッテルの化学日記とは同時期のものであり、両者を比較すると、一見してその違いを知ることが出来る。

文部省が明治7年(実際は9年)に本書を出版していた事、さらにこれがよく使用されたと言われていることも注目される。それは当時の東京における「化学」のレベルを物語っているからである。

#### ヘルマン リッテル Hermann Ritter 1828—1874 ドイツ人

明治3年(1870)12月に加賀藩の招きにより来日したが、財政上の理由から、大阪舎密局で、ハラタマの後を継ぐことになった。明治6年3月東京開成学校鉱山学科の教師となり、鉱山学を教えた。明治7年2月に天然痘により死去した。横浜外人墓地に埋葬した。東京谷中にリッテルの顕彰碑がある。

#### 16-1. 『理化日記』

リッテル 口授、市川 盛三郎 翻訳、  
明治三庚午季冬発兌、大阪開成学校、官版、初編  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

#### 16-2. 『理化日記』

リッテル 口授、市川 盛三郎 翻訳、  
明治五壬申初秋発兌、第四大学区第一番中学、官版、初編  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

明治3年12月から、リッテルが大阪理化学所で英語で行った物理学・化学の講義を市川盛三郎が翻訳して順に大阪開成学校から出版したものが、青表紙のものである。黄表紙のものは、明治5年に改めて第四大学区第一中学から出版されたものである。本書では、物理学と化学を巻を変えて記載されているが、書名は「理化日記」となっている。本書の化学では、化学式は全く書かれていない。

この本は、明治7年に文部省により、官版「化学日記」「物理日記」に改められて、明治9年に出版された。

#### 17. 『オランダの野草図鑑』 オーデマン著

Natuurlike Historie van Nederland de Flora

By Oudemans, C. A. J. A.

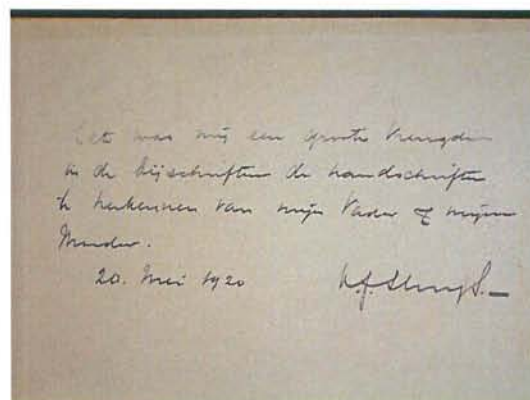
G. L. FUNKE, Amsterdam, 1869

附属図書館医学部分館蔵



1869年、アムステルダムで発行された、オランダの野草464種のカラースケッチが掲載された植物図鑑である。図譜1冊と解説3冊からなっている。この図鑑はスロイスが来日の際に持参したものである。わが国の野草とよく似たものが、オランダにも生えていることは興味深い。

図譜の植物図には索引番号が記されているのみで、このままでは植物名は分からない。解説部の索引を調べる必要がある。そこでスロイス夫人が解説部から、その学名を図譜に書き入れていた。このことは本書の表紙裏に、金沢生まれの長男 Lee K. F. Sluys が1920年5月20日に金沢を訪れたときに、次の写真のように証明している。



この本の著名は私の父と母のものであることを認めることは大きな喜びである。

1920年5月20日 K.F. Sluys

## スロイス夫人と子息

スロイス夫人(名前不詳)はドイツ婦人で、ボルネオで生まれ、12才までそこに住んでいた。

後に10年間、ヨーロッパで教育を受けた。英語を流暢に話すことが出来た。新婚早々の21才(スロイスは38才)で日本に船で来て、明治4年(1871)3月4日に金沢に着いた。金沢で長男を出産した。明治6年10月に帰国した。

夫人が植物学、動物学の講義の草稿を書いたとするものがあるが、それは確かではない。年齢から、少なくともこれらの高等専門教育を受けていたとは考えられない。

長男の名前は Lee K. F. Sluys, であり、オランダ海軍に所属し、軍艦 H. Ms. Hertog Hendik 号の船長として、大正8年(1919)5月に来日し、同月20日に生地金沢に来た。そのときに、スロイスの弟子たちに出会っている。

## 18. 『植物学』

スロイス 口述, 藤本純吉 筆記, 自筆稿本,  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

スロイスが医学基礎教育として、植物学の講義をしたものの講義録である。

内容は 卷之一では、植物の化学的組成、植物成分、植物の各組織の形態などを扱い、「植物ノ有機抱合ノ学問ハ大ナル舎密術ヲ要ス又屢顕微鏡ヲ要ス」と述べている。内容的には、当時の最新の植物学であった。卷之二では、リンネウス(Linne)系統による植物分類学を講義した。各論では、第一族で裸子植物、球果植物綱 Coniferae, で松科植物について触れている。以下、第八族まで 13+ $\alpha$  科の植物について、各々簡単に紹介している。注目すべきことは、引用した植物がすべてオーデマンの植物図譜に記載されていることから、この図譜を基にこの講義を行ったのである。

分類は次の通りである。

### 第一族 ケーヘルダラーヘル

- 甲 Pinus まつ科
- 乙 Geslacht Tacus, いちい科
- 丙 Juniperus ひのき科

### 第二族 Schermorayers

- 其一甲種 真種子性
- 其二乙種 曲種子
- 其三丙種 留没種子

### 第三族 副雑花植物

- 第一次族 管花状植物 きく科
- 第二次族 紐花状植物 きく科
- 第三次族 蝶花状植物 まめ科
- 第四次族 唇花状植物 しそ科
- 第四族 Solaneae なす科
- 第一種～五種
- 第五族 Papaveaceae けし科
- 第六族 Gramineae 穎花目, いね科
- 第七族 Urticaceae いらくさ科
- くわ科
- にれ科
- 第八族 交叉花状植物 あぶらな科

## 6. 「金沢病院」蘭医学からドイツ医学へ

### 19. 「金沢病院」

三條實美書, 年代未詳, 絹本扁額,  
金沢大学医学部記念館蔵  
本紙 185×60 (cm)



「金沢病院」は金沢大学医学部附属病院の前身であり、またその歴史は本学医学部の前史でもある。本学医学部の起源は、文久2年(1862)の彦三種痘所にさかのぼる。慶応2年(1866)に、医師黒川自然が中心となりオランダ医学による病院が卯辰山に設立された。この病院は、はじめは「養生所」と称されたが、後に「卯辰山病院」と改められ、傍ら医学生にオランダ医学の講義もした。明治3年(1870)2月に大手町(現在金沢総合健康センターの地)の旧津田玄蕃邸に「金沢藩医学館」が設立され、卯辰山病院の医学生はここに移った。明治4年3月、オランダ人医師 P. J. A. スロイスが着任して、医学の教育と患者の治療に担った。明治4年7月の廃藩置県により医学館はその経営基盤を失った。県は医学館を「官費を以て之を保続」としたが、「学制」の公布を前に、明治5年4月従来の藩立諸学校と貧病院は廃止された。津田淳三外9名の蘭方

医たちは私費で医学館を維持した。

明治6年4月\*に文部省令により、医学館の名称が「金沢病院」と改められた。スロイスは文部省の雇入となり、引き続き医学教育についた。明治8年7月1日\*に石川県はこの病院を維持することを決め、名称を「石川県金沢病院」とした。これと併設して金沢医学所を置いた。スロイスは雇用任期が終わったために、明治7年10月に帰国した。明治8年8月に、オランダ医 A. C.ホルトルマンが新たに着任した。明治11年9月に明治天皇の北陸巡幸があり、医学所で実験を天覧に供したのはホルトルマンであった。明治12年4月ホルトルマンは雇用期限が満ちて金沢を去った。

明治12年6月に、これまでの大手町の隣地(殿町、現NHK金沢支局の位置)に「金沢病院」が新築落成された。これは洋館建ての建物であり、新しい名所となった。医学所は大手町に残り、金沢医学校として医学生の教育機関となった。

新病院の開院は、これまでの蘭医学を中心とした医学教育および患者の治療に大きな変化をもたらした。このことは後に『文部省年報』で、従前の状態を「校舎規模甚狭小にて金沢病院内の一隅を区画し僅々数十の生徒に医学の大意を教授するに過ぎざりき」(『文部省第九年報』, 1882)と記していることから分かる。

「金沢病院」の額の成立は、この病院が新築されたこの時期であると見られる。額は、展示の絹本墨書のもの、それを版下とした木製のものが現存している。

その後、本病院の人事、組織が改変され、ドイツ医学が導入された。これに対して田中信吾を中心とする医師たちは、明治18年2月に新たに「私立尾山病院」を開設した。多くの患者が金沢病院よりもこの病院での診療を望み、隆盛を極めた。

\*この日付は資料によって異なる。ここでは『文部省年報』から採った。

### 三條實美 さんじょうさねとみ 1837-1891

幕末・明治前期の公卿、政治家、公爵。天保8年(1837)2月8日、贈右大臣三條實萬(さねとむ)の第4子に生まれる。尊皇攘夷運動に加わったが、文久3年(1863)8月の政変で失脚、七卿落ちの一人として長州に逃れた。慶応3年12月(1867)王政復古により帰京。新政府の議定となり、明治元年(1868)正月、岩倉具視とともに副総裁、2年7月右大臣。4年7月から18年12月の内閣制度実施まで、太政大臣の職にあった。その後内大臣に転じ、22年10月の黒田清隆内閣崩壊に際して一

時首相を兼任した。24年2月18日没、55歳。門地の高さ与人柄の誠実さで新政府最高の地位に就いたが、政治家としての決断力に乏しく、公家政治家としても岩倉に押されて名目的存在にとどまった。實美が「金沢病院」の額を揮毫した経緯は詳らかでない。

### 20. 「金沢細見図 明治20年5月」

千羽傳三蔵版、明治20年(1887)、  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵  
51×43 (cm)

明治12年(1879)6月殿町(現NHK金沢支局の位置)に竣工した「金沢病院」が描かれ、その隣に「医学校」がある。仙石町の「中学校」とあるのは明治20年4月に発足した「第四高等中学校」であり、その母胎は「石川県専門学校」であった。その建物は「啓明学校」・「石川県中学師範学校」の建物を引き継いだものである。現在も残る赤煉瓦の建物は、明治25年に竣工したものである。

明治20年8月に第四高等中学校に医学部が設置され、「金沢病院」は医学部臨床教育棟となった。ここでの医学教育は、明治38年(1905)に小立野の現医学部の地に「石川県金沢病院」が落成するまで続いた。

この金沢病院の図には、ガス灯、人力車まで描いてあるにもかかわらず、「金沢病院」の額はみられない。玄関ホールに掲げられていたのだろうか。

### 21. 「金沢細見図 明治9年12月」

千羽傳三蔵版、明治9年(1876)、  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵  
49×36 (cm)

### 7. 第四高等中学校校舎の設計図・棟札 (むなふだ)

山口半六、久留正道はともに文部技師であり、2人は明治中期から後期に、東京大学および第一高等中学校から第五高等中学校の建築をはじめ、多くの官立教育機関の建築設計に携わっている。金沢に現存する赤煉瓦造の旧第四高等中学校本館(現石川近代文学館、明治24年(1819)竣工)も彼らの設計によっている。

第四高等中学校は、仙石町の石川県専門学校の校舎敷地を引き継いで発足したが、石川県師範学校を移転させて敷地

をさらに広げ、2万坪の用地を確保した。校舎建築は同22年6月に着工し、同26年10月に落成式が挙行された。久留文部技師は、落成式に臨み、工事報告を行っている。「専ら授業管理衛生に適せしめんことを図り」、「学校経済を主とし、務めて堅牢を事とせしものなれば、学校建築の模範と為すにたるべきものあるは明言するを憚らず」。

## 22. 「第四高等中学校解剖組織学教場の棟札」(むなふだ)

医学部記念館蔵

20×106 (cm)

記載事項

(表面)

加賀国金沢

第四高等中学校解剖組織学教場木造平屋建百六十坪  
明治廿三年八月起工

同廿四年七月竣工

建築掛長文部三等技師従六位 山口半六

設計文部四等技師従七位 久留正道

建築事務主任文部属 森川正名

建築工事担任文部省雇 服部鉄五郎

建築工事取扱文部省雇 宮尾麟

工事請負人金沢市 清水伊三郎

(裏面)

大工棟梁

鶴筈小太郎

新保鉄三郎

野口栄治郎

小川仁三郎



(表面)



(裏面)

棟札は、建築物の棟上の時、工事の由緒、年月日、建築者、工匠などを記して棟木(むなぎ)に打ち付ける札であり、建物の歴史を知る最良の資料となる。展示は、赤煉瓦の本館の後方に建てられた同校医学部解剖組織学講堂の棟札。平面図、切断図が示すように、階段席は中央の教示台を囲むように置かれている。このため多角形の外観を持つ建物となる。煙突、上げ下げ窓、下見板張り外壁も加えて、モダンな印象を与えたにちがいない。

## 23. 「第四高等中学校医学部解剖組織学講堂平面之図」

「廿二年九月十七日写 尺度式拾分ノ巻」

第四高等学校同窓会蔵

81×63 (cm)

山口半六の認め印がみられる。

## 24. 「第四高等中学校医学部解剖組織学講堂切断面之図」

「尺度式拾分ノ巻 廿二年九月九日写」

第四高等学校同窓会蔵

92×63 (cm)

山口半六の認め印がみられる。



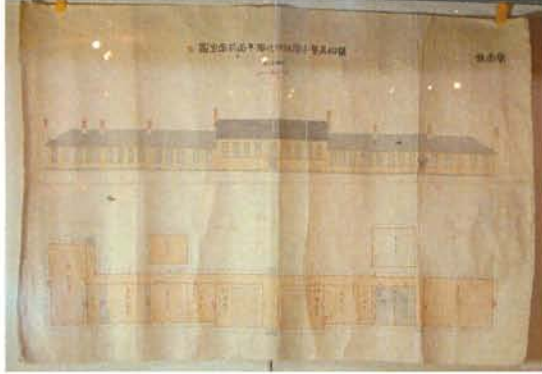
## 25. 「第四高等中学校物理化学平面及び全面之図」

(明治 23 年)

「尺度百分之壺 明治廿二年三月廿二日写」

第四高等学校同窓会蔵

67×101 (cm)



山口半六、久留正道の認め印がみられる。厚地和紙に墨描き、淡く彩色してある。仙石町の敷地内にあった「物理化学実験教場」(明治 22 年起工, 23 年竣工)は現在、愛知県犬山市の明治村に保存されるが、移築の際両翼が縮められている。建物の中央部左右に化学と物理の階段教室がおかれる。煉瓦の煙突、上げ下げ窓、下見板張り外壁等、「解剖組織学講堂」と共通した部分がある。

## 26. 「医学部東部教場」

「木造平屋建 総坪百五十四」

第四高等学校同窓会蔵

45×63 (cm)

## 27. 「医学部西部教場」

「木造平屋建 総坪百六十七」

第四高等学校同窓会蔵

45×63 (cm)

## 28. 「第四高等中学校略図」

『第四高等中学校一覧 自明治 26 年至明治 27 年』付録  
附属図書館蔵

## 8. 第四高等学校をめぐる人々

### 29. 「至誠」

小松宮彰仁親王書, 明治頃, 絹本扁額,

資料館蔵

270×180×9 (cm)



小松宮彰仁親王は伏見宮邦家親王の第八皇子で、皇族軍人であった。明治 34 年(1901)9 月の金沢での日本赤十字社総会に臨席するために、同社総裁として訪れた。

親王が来県して第四高等学校を訪れた際に、校長北条時敬は同校講堂に掲げる扁額の染筆を願い出た。これに応じた親王は「至誠」の書を下賜した。第四高等学校ではこれを額装して講堂に掲げ、以後この講堂を「至誠堂」と呼んだ。「至誠」の出典は、儒教の総合的解明の書である『中庸』である。そこには「誠は天の道なり」、また「至誠は息むことなし」、「誠」は真実無妄のことであると記されている。

額縁は日本画家山田敬中(当時石川県工業学校教諭)の意匠により、村上九郎作が制作したものである。

### 小松宮彰仁親王 こまつのみやあきひとしんのう 1846～1903

親王は嘉彰親王とも称した。明治 3 年(1870)に東伏見宮家を創設し、のちに小松宮彰仁と改めた。

戊辰戦争、佐賀の乱、西南戦争で軍功をあげ、さらに日清戦争では征清大総督となった。一方、海外留学・外遊経験を生かして、明治 20 年の英国ヴィクトリア女王即位 50 年祭への参列をはじめ、各国皇族・大統領との謁見、勲章の授与・拝受や、各国首脳との会見等の華やかな外交に関わった。

明治 21 年には、勅旨により枢密院に列して、憲法案・皇室典範案等の審議に臨み、その制定施行に関与した。

明治 20 年に日本赤十字社総裁、明治 31 年には元帥となった。明治 36 年に 57 才で歿。

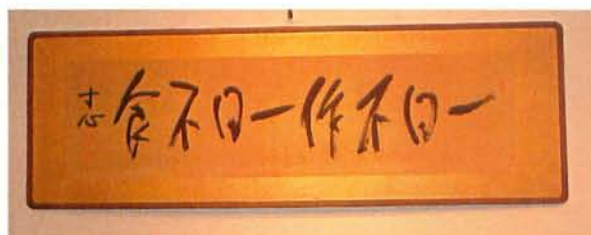


### 30. 「一日不作一日不食」

西田幾多郎書、年代未詳、紙本扁額、

教育学部蔵

本紙 130×35 (cm)



西田の没後に娘たちが書いたエッセイ\*に、金沢の「私の家では昔は客間に、私の娘の頃は母の室の床に、いつも「一日不作一日不食」という軸が懸かっていた。本当に私達の父は一日考えざれば喰はざる様な人であった。」とあり、また「父は本を読むか、結跏趺坐の姿勢で目をつぶって、足の先を貧乏振ひさせながら考へて居る時の外は、この半紙を前に置いて、書いたり、読んだり、消したりしていた。」とある。西田の好んだ言葉であったことを物語っている。

「一日不作一日不食」は中国の禅宗史書の一つである僧伝の集成『五灯会元』(ごとうえげん)に見える逸話に基づいている。『五灯会元』の百丈懐海(えかい)禅師の項に次の文章がある。

「師、凡そ務を作し、労を執るに、必ず衆より先んず。主者忍びず。密に作具を収めて之を息はしめんと請ふ。師曰く『吾徳争なし、まさに人より勞すべし』と。既に遍く作具を求めども、獲ずしてまた食を忘る。故に一日作らざれば、一日食らはず。」

\*『わが父西田幾多郎』、西田静子、上田弥生著、1948、p53.

#### 西田幾多郎 にしたきたろう 1870-1945

哲学者。能登半島の付け根、河北郡宇ノ気村に、十村を勤めた家の長男として明治3年(1870)に生まれた。村の小学校卒業の後、金沢に移った。明治19年に石川県専門学校付属初等中学校第二級に入学した。この頃西田は入学以前に親族を介して北条時敬(ときゆき)から数学の指導を受けていた。入学後は、北条宅に下宿した。ここから彼等の生涯にわたる師弟関係が始まった。北条は29歳、西田は16歳であった。

北条は、菩提寺が泉寺町臨濟宗宝勝寺であり、父が伝燈寺町臨濟宗妙心寺派伝燈寺に僧籍を持つともいわれ、禅に関心が深かった。明治19年3月の北条の日記には、高岡市の国泰寺雪門禅師を訪れ、入門したとある。

西田はこの頃のことを後にエッセイで述べている。「私が先生の御宅にいた頃かと思う。一日、東京からT君が来て先生と話している時、先生は黙って私とT君に『遠羅天釜』\*を一冊ずつ下さった。T君は禅というものはどういふものかというようなことをいったら、先生は脇腹に刃を刺し込む勇気があったらやれというようなことをいわれた。ただそれだけである。」(「北条先生に始めて教を受けた頃」)西田は北条の人格に触れるうちに禅に傾斜していったと思われる。

西田は、明治20年に第四高等学校予科第一級に入り、翌年本科に進学するが、23年に中退し、24年帝国大学文学部哲学科選科に入学した。27年同科を卒業し、その後第四高等学校講師、山口高等学校教授を経て、32年に第四高等学校教授となり、ドイツ語、英語を担当した。四高では10年過ごし、学習院を経て、43年京都帝国大学に移り、ここでようやく研究者としての環境を得た。

この間、就業の不安定と家庭の苦悩から、西田は参禅の経験を重ねるようになった。山口時代は夏冬の休暇に京都妙心寺、大徳寺等で、金沢においては卯辰山の雪門禅師\*\*\*のもとで参禅した。

西田の「寸心」の号は雪門禅師から与えられたものである。明治34年3月17日の日記に、「洗心庵にゆき、戒を受け、寸心居士の号を雪門老師より賜はる」とある。「寸心」は、杜甫の五言古詩「偶題」\*\*からとられたものであり、方寸(3cm四方のごく小さな)の心の意味である。また、明治36年8月西田は大徳寺孤蓬庵広州禅師からの「公案」(参禅者に出す課題、難問が多い)を通過している。

西田は参禅に励む一方で哲学研究にも打ち込んだ。四高での10年の間に発表した論文をまとめたのが、最初の著作『善の研究』(1911)である。独立自全の純活動としての「純粹経験」こそ「唯一真実在」であり、主観、客観の対立も知情意の分離も、真も善も美も神も究極的にそこに帰着すると考えた。

\*『遠羅天釜』(おらてがま):臨濟宗の禅僧白隠の仮名書法語集。

\*\* 偶題 杜甫 大暦元年(766)作

「文章千古事、得失寸心知」(文章千古の事、得失寸心知る。:文章は永遠不朽の事業であるが、その佳否得失はただ作者自家の方寸の心を知るばかりである。)に始まり、漢代からの文章の沿革・詩論を述べ、「敢えて佳句を要せず、愁ひ来りて別離を賦す。」(敢えて佳句を求めようとはしないが、愁ひの湧き来るままに故郷を離れているころ

もちを述べた。)で終わる。杜甫の晩年に至る漂白の時期に書かれたものである。

\*\*\* 道津玄松雪門

北条が師とした道津玄松雪門は、嘉永3年和歌山県に生まれ、寒川(そうがわ)安楽寺で得度し、京都相国寺で印記を受ける。明治17年に高岡国泰寺の住職を勤めたが、明治26年退山し、金沢市卯辰山の麓に洗心庵と称する草庵を構えここに籠もった。

### 31. 「至誠無息」

岡上梁書, 昭和16年(1941), 紙本扁額,

附属図書館蔵

本紙 136×33(cm)



「至誠無息 / 皇紀二千六百一年 / 九月 / 梁書 / 岡上梁印 簡堂」

至誠は息むこと無し (しせいはいやむことなし)  
中庸の一節。「故至誠無息。」

四高第11代校長 岡上 梁(おかのうえ りょう)は明治13年(1880)高知県生まれ。36年 東京帝国大学文科大学哲学科に卒業。39年～43年春まで石川県立金沢第一中学校教諭をつとめる。昭和14年(1939)4月、浦和高等学校より四高へ転任を命ぜられ、病氣療養の後、8月下旬に四高に赴任した。岡上校長が四高に在任した14年～18年は、日に日に戦時色が色濃くなり、その影響が学校教育へも大きな影を落としはじめた時期であった。

昭和15年、教育勅語渙発五十周年並びに紀元二千六百年記念事業(御真影奉安殿造営、記念植林並開拓)を遂行する機関として、「四高至誠会」(会長:岡上梁)が設立される。同年9月には、教育の刷新を通して修練の強化をはかる「四高新体制」が岡上校長から宣言され、禁酒禁煙断行、享乐的飲食店出入り禁止、映画劇場への入場制限等が示された。さらに11月には岡上校長を団長として「北辰報国団」が結成される。昭和16年、文部省より報国隊結成に関する訓令が発せら

れ、第四高等学校報国隊は同年10月10日に結成式を挙げた。この年、太平洋戦争勃発。戦時体制は一層強化され、大学等の在学年限の短縮、「戦時学徒自戒五条」、「大東亜建設に処する文教政策」など、教育の分野にも様々な戦時政策がとられるようになった。昭和18年9月岡上校長は依願退職した。

校長は剣道の達人で、剛毅朴訥を代表したような人物であったという(『四高八十年』)。

### 市村塘 いちむら つつみ 1872～1945

明治5年(1872)、金沢市小立野に生まれる。25年、第四高等中学校を、28年、東京帝国大学理科大学植物学科を卒業する。二高教授を経て30年、四高教授に着任。昭和7年(1932)に退官するまで一貫して動物及植物を講じ、後名誉教授となる。草創期の大学を卒業後、各地に在住して研究・教育に携わり、地方独自の生物相を解明していった人々のうちの一人。著書には、旧制高等学校用の教科書「近世動植物学教科書」「動物植物顕微鏡実習摘要」や「Important Medicinal Plant of Japan」「石川県下野生有用植物」など多数あり。明治・大正期における県下の生物学研究に大きく貢献した。

今回展示する講義録にはそれぞれ日付が入っており、明治25～同26年にかけて、東京帝国大学医科大学生理学講座、東京帝国大学理科大学のそれぞれの講座において行なわれた講義を筆記したものである。学問分野の特色でもあろうが、図が多く、掛図などを用いて講義したものと思われ興味深い。

### 32. 市村塘筆記 帝国大学医科大学講義録

附属図書館蔵

Physiologie, bei Prof. K. Ozawa 1893. 9. 12

Physiologische Chemie, by Prof. M. Kumagawa 1893. 9. 16 合本  
大澤 謙二 おおざわ けんじ 1852-1927

在職期間: 明治19-大正4(1882-1915)

近代生理学の祖。本姓大林。豊橋藩侍医大澤家の嫡子となる。14歳にして上京医学所に学んで中得業士となり二回にわたりドイツに留学。明治15年(1882)、帰国して東大生理学教授となりチーゲルに代わって講座を担当する。21年、最初の医博の学位を受けた。生理学の教育に従事し、講義のかた

わら開国期の医学界の啓発に尽し、学界の柱石となる多数の学者を育てた。

**隈川 宗雄** くまがわ むねお 1856-1918

在職期間: 明治 24-大正 7 (1891-1918)

わが国医科学の開基者。安政 5 年(1856), 福島県板倉藩に生まれる。本姓醫原。明治 2 年(1869), 東京の医家隈川宗悦の養嫡子となり, 8 年, 東京大学医学部に入学, 16 年卒業。ドイツに留学。23 年, 帰国し 26 年, 医科学講座担当を命ぜられる。後に東京帝国大学医科大学長となった。

### 33-34-35. 市村塘筆記 東京帝国大学理科大学講義録

附属図書館蔵

Systematic Botany (from monocotyledon), by Prof. J.

Matsumura (日付なし)

Lecture on Botany, Continued by J. Matsumura 1892. 12. 2

Botany, lectured by Prof. Matsumura (日付なし)

Botanik, bei Mr. J. Matsumura 1892. 3<sup>rd</sup> March 合本

**松村 任三**(まつむら じんぞう) 1856-1928

在職期間: 明治 16-大正 11 (1883-1922)



松岡藩家老の松村儀夫の長男として, 常陸国に生まれる。明治 3 年(1870), 大学南校(現東京大学)に入学。10 年, 小石川植物園に出仕する。19 年, ドイツに留学。ハイデルベルクおよびヴェルツブルク大学で植物分類学を学び, 21 年帰国。23 年, 理学博士となり第 2 植物学教授, 並びに初代附属小石川植物園長などを勤め, 現在の東京大学理学部植物学教室の基礎を築いた。

Palaeontology, by Prof. M. Yokoyama 1893. 9. 12

**横山 又次郎** よこやま またじろう 1860-1942

在職期間: 明治 22-大正 13 (1889-1924)

安政 7 年(1860), 長崎に生まれる。明治 15 年(1882), 東大理学部地質学科卒。農商務省地質調査所に入り, ナウマン

Naumann のもとで働く。19 年辞し, ドイツ留学。ミュンヘン大学で古生物学を研究し, 22 年帰国。古生物学を担当する。主に中生代新生代の軟体動物化石, 中生代, 古生代の動物化石を研究。日本の古生物分類学, 層序学研究の基礎を築く。

Comparative Anatomy, by Prof. I. Iijima 1893. 9. 14

**飯島 魁** いいじま いさお 1861-1921

在職期間: 明治 19-大正 10 (1885-1921)

文久元年(1861), 浜松に生まれる。明治 14 年(1881), 東大動物学科卒業。翌年ドイツ, ライプチヒ大学留学。帰国後, 東京帝国大学理科大学動物学教授となる。24 年, 学位を得る。日本の寄生虫学の開祖であり, 海綿類に関する業績も著名。

### 36. 『石川懸下野生有用植物』

市村塘, 安田作次郎共著,

石川県図書館協会刊行, 昭和 16 年(1941),

附属図書館蔵

石川県立図書館の委託により著述。

県下の野生植物 1,083 種の和名, 漢名, 学名, 形態, 開花期, 結実期, 産地, 用部及び主成分, 応用を記述したもの。巻末に植物の写真あり。

共著者安田作次郎は, 元石川県立羽咋中学校長。

**浦井 鯉一郎** うらいこういちろう 1868-1932

第四高等学校教授

東京に生まれる。明治 25 (1892) 年東京帝国大学分科大学史学科を卒業し, 直に第四高等学校教授となり, 退官する明治 15 年(1926)までの 34 年間および退官後も講師として, 一意西洋史を講じた。

ドイツ史学界の泰斗ランケ Ranke の学風を受け継いだ講義は理路整然とし, 英法科では英語で, 独法科ではドイツ語で行い, 学生は手に汗握って聞いたほど面白かったという。また, 名利を追わず, 淡々たる一学究・教壇人として, 四高のために全生涯をささげた。

著書「復習用西洋歴史年表」は, “生徒が筆記の労を省き且復習の便に供せんが為に編さんせる”(上の巻「凡例」より)との言のとおり, 謹厳の中にも慈愛あふれる教官であった。

### 37. 『復習用西洋歴史年表』

浦井 鐘一郎著, 富山房,

明治 37-40 年(1904-1907), 全 3 卷,

附属図書館蔵



自著への、メモ的なものから新しい研究成果や考察を加えたものまで、空白が埋まってしまふほどの書き込みが入っている。氏の学問への情熱、講義への真摯な取り組みが伺える。

### 黒本 稼堂 くらもと かつどう 1858-1936

漢学者。名は植(うえる)。幼名栄太郎。第四高等中学校の記録では、安政5年(1858)2月12日、加賀国石川郡専光寺村(現在金沢市専光寺町)生まれとあるが、実際は石川郡宮腰村(現在金沢市金石)に生まれ、専光寺村黒本家の養子となつたらしい。石川県中学校西校、石川県師範学校等で小学校教員の講習を修め、また藤田維正(容齋)、藤沢南岳、川田剛、重野安繹、小中村清矩らに、和・漢・英学の教授を受けた。東馬場小学校訓導補(17歳)をふりだしに、中学校・師範学校の教員を勤め、明治21年(1888)4月第四高等中学校雇教員、24年5月同助教授となったが、翌年7月非職を命ぜられた。その後も大分県尋常師範学校、第五高等中学校、京城第一中学校等の教員を勤め、漢文を教えた。大正末年には金沢に帰り、文筆に勤しんだ。墓は金沢市桂岩寺にある。

著作には『稼堂集』(漢詩文集)のほか、『稼堂叢書』(古典の注釈等)、『花守集』(和歌集)、『三州遺事』(伝記集)などがある。またその蔵書は、「稼堂文庫」として金沢市立玉川図書館に収蔵されている。

### 38. 『師友簡録』

黒本稼堂著, 自筆稿本,

附属図書館蔵

稼堂がその受信を自筆をもって写しとどめ、みずから装幀して和装3冊にまとめたもの。藤田維正等、広い交遊と親昵が伺われる好資料。展示箇所は夏目漱石書翰の写し。

### 39. 「自筆短冊」

黒本稼堂書,

個人蔵



(自筆短冊積文)	
漫被巫醫誤養方	牛乳鷄卵兆垂腸
身如蒲柳心如狗	眼下滔々徐偃王
稼堂叟(印)	

医師の誤診により、下痢に苦しんだことを七言絶句の形にしたもの。「徐偃王」は古代中国の人物で治水に功があったといわれるが、稼堂の「病」との関係は未詳。

### 狩野 亨吉 かのう こうきち 1865-1942

慶応元年(1865)11月28日、出羽国秋田郡大館町(現在秋田県大館市)に生まれる。明治9年(1876)上京。番町学校、東京府第一中学、大学予備門を経て、21年帝国大学理科大学数学科を、24年同文科大学哲学科を卒業し、大学院で数学を研究。25年7月第四高等中学校教授に任じ、26年10月本部教長となったが、翌27年3月辞職。31年1月第五高等学校教授、11月第一高等学校長。39年7月京都帝国大学文科大学教授(倫理学講座担当)、補京都帝国大学文科大学長。40年文学博士。41年病気を理由として辞職するも、文部省の天下り人事に抗議してのことであった。その後一切の官職に就かず、また生涯独身を通し、東京の一隅に書画の鑑定売買を業として暮らした。安藤昌益・本多利明らの思想家を発見し、倫理学・論理学に深い造詣を有したが、著述を好まず発表を嫌ったので、残された業績は数編の論文にすぎない(安倍能成編『狩野亨吉遺文集』岩波書店、1958年に集録)。昭和17

年(1942)12月22日没。78歳。旧蔵書は京都大学と東北大学に納められた。和漢の貴重書が多い。

金沢における亨吉ははじめ西田幾多郎の持ち家(長町)に住み、一時長土堀に居を転じたが、再び長町に戻って西田の隣家を借家とした。亨吉は常に数人の生徒を居候させ、その生活費まで面倒を見た。その中には八田三喜(後に新潟高等学校校長)のように、生涯亨吉に師事した者もいたが、女性問題を起して亨吉を悩ませるものもあった。

#### 40. 「自筆短冊」

狩野亨吉書、  
個人蔵



亨吉が短冊に題した  
良嘉を詠う歌二首

(短冊積文)  
いにしへのますらをの姿見るかこと  
櫻さきけり金澤の柵 良嘉

短冊の裏面には「文學博士理學士狩野亨吉先生」と墨書され、昭和17年(1942)12月の新聞記事(亨吉の訃報)が貼付されている。しかし亨吉が「良嘉」の名を用いた例は知られていない。また彼は揮毫も好まなかったらしく、残された墨跡は決して多くない。ただ、青江舜二郎著『狩野亨吉の生涯』(明治書院、1974年)には、亨吉が叔父狩野旭峯(ジャーナリスト、父の弟、諱は良貴)の長寿を祝って贈った短冊二枚が掲げられていて(図版参照)、その筆跡は右短冊と同一人の手になるものと判断される。また亨吉以前の狩野家は代々、諱に「良」字を冠しているから、亨吉の諱が「良嘉」であっても不自然ではないであろう。

この歌の詠まれた時日は不明である。ただ、亨吉には上京の「旅日記」があり(東京大学教養学部図書館蔵)、そこには明治9年4月「厨川を渡る。金沢の柵を左の方に望む。横手を過ぎ岩崎湯沢を過ぐ。」との記述が見え、12歳の亨吉は馬上から金沢の柵(かねざわのさく。横手市金沢にある城跡。後三年の役で著名。源義家による包圍を受けて落城)を望見している。歌はこの折の記憶を詠んだものであろう。

## 9. 石川の知識人

### 41. 「明朗敢為」 めいろうかんい

永井柳太郎書、年代未不詳、紙本扁額、  
資料館蔵、石川県師範学校旧蔵  
本紙 165×60 (cm)



石川県師範学校では、昭和9年(1934)11月に創立60周年記念祝典が行われた。『石川県師範学校同窓会会報一母校創立六十周年記念号一』(昭和10)には、講堂の様子を「入口、明倫堂の巨額の左右には、陸軍大臣林銑十郎閣下の「剛健醇美」、前拓務大臣永井柳太郎氏の「明朗敢為」、の二額があり、側壁の前田利為侯の「養正」の額と共にこの厳肅な式場をより一層緊張させている。」とある。「明朗敢為」は、明るく朗らかに実行するの意味である。

当館の館蔵品となっているこれらの扁額が何時、どのように書かれたものかは明かでないが、この式典のために調筆依頼された可能性がある。

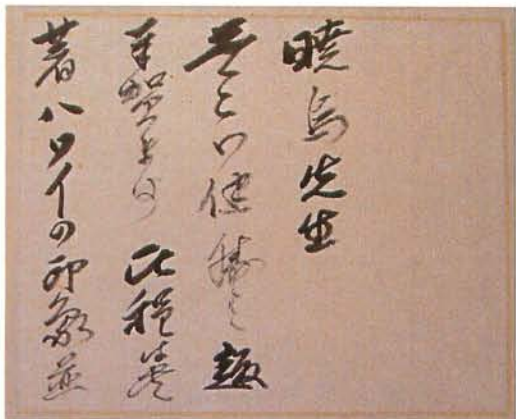
### 永井柳太郎 ながいりゅうたろう 1881-1944

政治家、教育家、ジャーナリスト。明治14年(1881)、金沢市中主馬町(現 菊川)で生まれた。38年、早稲田大学を卒業した。英国留学後、早稲田大学で社会政策、植民地政策を講義した。そのかわり、大隈重信が刊行した雑誌『新日本』の主筆を務めた。大正6年(1917)早稲田大学を辞して、同9年に憲政会から衆院選挙に当選、以後連続当選をした。進歩主義と雄弁を生かし大正デモクラシーを推進して、普通選挙法の成立に尽力した。昭和8年(1933)に立憲民政党の代表となり、斎藤実、近衛文麿、阿部信行内閣で拓務、通信、鉄道の各大臣を務めた。昭和15年に民政党を脱党した。晩年は右傾した。昭和19年(1944)、63才で没した。三木内閣の文部大臣永井道雄(社会学者)は次男である。

42.「永井柳太郎 暁烏敏宛書簡」(昭和9年8月27日)

書簡 縦 約18cm

附属図書館蔵



金沢市出身の政治家、永井柳太郎が暁烏敏に宛てた書簡。

『満洲實録』の帙の内側に貼られている。この『満洲實録』は、永井が満洲国特使から贈られたものを暁烏に贈ったことが書中から伺える。昭和9年(1934)3月、満洲国帝政が実施され、修聘特使として國務總理大臣 鄭孝胥、財政部大臣 熙洽の両氏が来日する。当時、拓務大臣であった永井も4月2日夕刻より特使の歓迎会を催したことが、翌朝の朝日新聞に掲載されている。『満洲實録』はこの際に入手したものであろうか。

永井が書簡の冒頭で、暁烏からの著書贈呈の謝意を述べているように、暁烏もたびたび永井に自著を贈るなど、両者の親交は深かった。

暁烏は書籍の収集に熱心で、5万冊に及ぶ蔵書は昭和25年に金沢大学に寄贈された。永井からの『満洲實録』の贈呈は、書簡を帙に張り込むほど嬉しい贈り物であったことは、想像に難くない。

『満洲實録』

8巻 遼寧通志館 1930年

附属図書館蔵



清の太祖ヌルハチの実録。満洲族の発祥伝説から書き起こしており、ヌルハチに関してのみならず、広く当時の女真族に関する重要な史料。

各ページを3段に分けて上から順次満漢蒙の3体で記され、全編にわたって多くの絵図が挿入されていた。この遼寧通志館本の本文は漢語のみとなっているが、絵図の影印部分からは満漢蒙の3体で記されていたことが分かる。

「満洲實録」  
 (帙に直接書き込み)  
 昭和九年九月初 敏  
 (永井書簡)  
 暁烏先生  
 益々御健勝之趣  
 奉賀ます 此程は貴  
 著ハワイの印象並  
 二神武建国之精  
 神の二冊御恵送被下  
 御芳感激之至

二存しました 厚く  
 御禮申上ます 此頃  
 は冬の浪人生活にて  
 讀書を樂しみ居り  
 ます 折柄 先生の御  
 教訓に接し得ること  
 を折々嬉敷く存し  
 ます 小生は石川縣  
 下水害地の仮道路  
 仮橋梁の出来る  
 頃一度見舞芳帰郷

致度其節は北安田  
 (も)御訪ね申上度存  
 して居ります 別便  
 満洲實録は過日滿  
 洲國特使来朝の節  
 偶然にも同じものを二  
 部貰ひましたので其  
 一部を先生の御覽に  
 入れ度差上るのであ  
 ります 何かのご参考  
 ともなりますならば

幸甚であります 御  
 禮芳右のみ 不一  
 八月二十七日  
 柳太郎

暁烏敏 あげがらすはや 1877-1954

松任市の明達寺に生まれた真宗大谷派の僧で、明治・大正・昭和の思想界・宗教界に大きな影響を与えた。清沢満之の信仰を伝え、宗門の禁書であった『歎異抄』を世に広め、晩年は東本願寺宗務総長を務めるなど仏教の近代化に尽くした。また『精神界』をはじめ多くの雑誌を編集し、執筆者としても活躍した。

昭和24年(1949)、創立間もない金沢大学に暁烏家所蔵の香草文庫のうち約5万冊が寄贈された。仏教書のみならず広い学問分野の書籍群は、「暁烏文庫」として現在に至るまで多くの学生・研究者に利用されている。

#### 43. 「奉事億如来」

暁烏敏筆，年代不詳，紙本扁額  
附属図書館蔵 大橋和臣氏旧蔵  
本紙 65×45 (cm)



#### 44. 「飛化遍諸刹」

暁烏敏筆，年代不詳，紙本扁額  
附属図書館蔵 大橋和臣氏旧蔵  
本紙 65×35 (cm)



億の如来に奉事し，飛化して諸刹に遍く  
おくのによらいにぶじし，ひげしてしよせつにあまねく

『仏説無量寿経 卷下』の“東方偈”とよばれる偈文の一節。  
『仏説無量寿経(大無量寿経)』は『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』とともに浄土三部経の一つで，浄土宗・浄土真宗の根本經典である。

暁烏は9歳で『無量寿経』の読誦を習い，17歳でその講義を聞き，その後，この経とは不可離の生活をしてきたが，大正7年9月，妻総子の病気の看病をしながら『大無量寿経』の静読を始めた。ここから，これまで『歎異抄』に傾倒していた暁烏の関心が『大無量寿経』へと移っていくのである。

その後，『無量寿経』の講話を各地で行い，それらは15冊の『仏説無量寿経叢書』として発刊された。扁額の一節がある“東方偈”は，大正13年8月15日～21日にかけて石川県松

任市北安田の明達寺で行われた夏期講習会にて講じられた。

#### 45. 「『歎異抄』を誦む(46)」自筆原稿

#### 46. 『精神界』第3巻1号

(明治36年(1903)1月10日発行)



浄土真宗の開祖である親鸞の談話を側近の一人が記録した『歎異抄』は，浄土真宗中興の祖といわれる蓮如により，誤解を招きやすい危険な書として室町以降は封印されたような状態にあった。師・清沢満之のすすめもありこの書を読み始めた暁烏敏は，「最も私を感化し，また最も私を慰めてくる聖典」と深く感銘を受け，『歎異抄』を世に広めるために明治36年1月より43年12月まで，8年間55回にわたって雑誌『精神界』に連載し，明治44年に一冊にまとめて『歎異抄講話』として刊行した。

#### 暁烏敏感想等書入図書

#### 47. 現身仏と法身仏

姉崎正治著，有朋館，明治37年(1904)，  
附属図書館蔵

『暁烏敏日記 上』によると明治37年10月8日にこの書を買ひ，翌日に序を読んでいる。本文は24日夜から読みはじめたようであるが翌日の午後には読み終え，次のような感想を述べている。「得る所多し。本書の内容は，よく予が今日の信念の発展の跡を語り。うれし。」全体にわたって紫色鉛筆，赤ペンによる傍線箇所がかなり多い。

十月廿五日夜自坊北の室，先師遺影の下にて読了す，如来加度の裡に本書に依りて与へられたる靈感を謝し奉る 非無子

(巻末 p.263 墨書)

明治三十七年十月八日入手  
東京にて 非無

(見返し 墨書)

#### 48. 遠羅天釜(おらてがま)三巻, 続集一卷

白隠慧鶴著, 寛延4年(1751), 和装3冊

附属図書館蔵

初版は1749年。臨濟宗の禅僧白隠慧鶴(はくいんけいかく)(1685~1768)による仮名書法語集。平易に禅の要義を説く。

書名は彼が愛用していた茶釜の名によるが、弟子の慧梁が言うようにそれが何の意味かはわからない。

『暁鳥敏日記 上』によると明治37年10月28日の夜に上巻を読了, 11月5日の夜から中巻を読み始めたところ「巻を離す能はずして読了。時に十一時也。先師没して已来この清風に接すること稀なりき, 快極まりなし。」との感想を述べている。

9日の夜には全巻読了した。朱筆による傍点箇所が多い。

明治三十七年十一月九日の夜読之中巻尤も深く上巻之に次ぎ下巻尤も浅し 非無

(続集巻末 朱書)

明治三十七年十一月五日手を離すを得ずして読誦し終る転た自己所の不足を悟り, 白隠の仏性を自己眼前に見る事をも得たり快極りなし 非無記

(下巻末 朱書)

明治三十七年十月廿八日夜 非無

(上巻末 朱書)

#### 森田柿園 もりたしえん 1823-1908

幕末から明治にかけて活躍した郷土史家である。幕末には加賀藩茨木家に仕え主家の家譜編纂にあたった。この頃から郷土史家としての評価は高かったようで、明治に入ると前田家の御家録輯職や書籍旧記の取調主任に任じられ、この際には棄却図書若干巻および金沢県庁の保管下に入ったもののうち26箱を譲与された。明治9年に官職を退いてからはより精力的に加賀・能登・越中の歴史・地誌の編纂・収集・書写・著述活動を行った。

#### 50. 『加賀諸神社縁起』

森田柿園書, 明治29年(1896), 自筆稿本,

附属図書館蔵



「加賀諸神社縁起」は序文によると貞享~享保年間\*に各社寺が作成した縁起を、「後世伝来の旧記もなく僅に聞伝へる伝説に蛇足を交へ神官社僧の筆に任せたるなれば恐らくは附会の妄誕も多かるならんか」としながらも「外に見るべき記録もなく其中にも聊抛とすべきふしもなきにあらねば」「旧跡搜索の参考と」するために一冊にまとめたもので、黒津船社はじめ55社の縁起の書写である。

\*実際には嘉永年間まで時代が下っている。

なお、見返に「西湾図書」という蔵書印が押してある。これは故水上一久教授の蔵書で、昭和51年度に金沢大学が近八書房を通して購入し、蔵書としたうちの1冊である。

#### 49. 『火の柱』

木下尚江著, 6版, 東京: 平民社, 明治38年(1905),

『暁鳥敏日記 上』によると明治38年5月5日に『良人の告白』とともに『火の柱』を買い求めた。9日になって眠れぬまま「一時より『火の柱』をよみ, 三時近くまで読みふけり, 翌日午後には読了した。朱筆の傍線箇所が数箇所にある。

明治三十八年五月九日の夜より十日の午後にかけて読了。主人公篠田順二は作者が理想的人物を描ける也 我その社会主義に全然賛成はせされ共篠田の人格に膝まつくを辞 せず権門の松嶋を捨てこの偉人に一身の愛をささげたる梅子亦完全なる佳人と称すべし

(巻末 朱書) p.304

非無生



## 出品機関

金沢市立玉川図書館近世史料館  
第四高等学校同窓会  
前田土佐守家資料館  
金沢大学医学部  
金沢大学教育学部

## 協力者

赤祖父 一知  
板垣 英治  
宇佐美 孝  
江森 一郎  
梶井 重明  
片桐 和雄  
川野 正博  
喜田 惣一郎  
杉本 幹博  
寺畑 喜朔  
瀬端 浩  
千田 省志  
武田 幸男  
竹松 幸香  
田畑 繁之  
中村 信一  
福田 龍二  
古畑 徹  
山本 博

## 編集・執筆者

在田 則子 (資料館)  
池上 佳芳里 (附属図書館)  
板垣 英治 (金沢大学名誉教授, 資料館客員研究員)  
押見 智美 (附属図書館)  
笠井 純一 (文学部教授・資料館長)  
近藤 真史 (大学院文学研究科)  
田嶋 万希子 (資料館)  
野村 洋子 (附属図書館)  
古畑 徹 (文学部教授)

(敬称略, 五十音順)

平成 16 年度金沢大学附属図書館・資料館特別展

「文字・人・ころー金沢大学ゆかりの墨  
蹟・拓本・手跡ー」図録

金沢大学附属図書館・金沢大学資料館

発行日 平成 16 年 10 月 25 日

「文字・人・こころ—金沢大学ゆかりの墨蹟・拓本・手跡—」配置図

